

出雲国風土記の「目一つの鬼」の特異性

Peculiarity of “One-eyed Demon” in Izumo Province Fudoki

宮 口 恋 花

Honoka MIYAGUCHI

一

上代の風土記の一つ『出雲国風土記』の中に次のような記事が見られる。

阿用（あよ）の郷。郡家（こおりのみやけ）の東南（ひがしみなみ）一十三里（さと）八十歩（あし）なり。古老（ふるおきな）伝へて云（い）ひしく、昔、或（あ）る人、此処（ここ）に山田（やまだ）を佃（つく）りて守（も）りき。その時、目一つの鬼来て、佃る人の男を食ふ。その時、男の父母（かぞいろ）、竹原（たかはら）の中に隠れて居（を）りき。時に、竹の葉動（あよ）けり。その時、食はるる男「動（あよ）く動（あよ）く」と云ひき。故（か）れ、阿欲（あよ）と云ふ。（神亀（じんき）三年、字を阿用と改む。）」

これは、『出雲国風土記』に記されている「阿用郷」という地域に残る伝承である。

山田を守る男が「目一つの鬼」に食われるという話である。食われる時に発した「動（あよ）く動（あよ）く」という言葉が地名の由来となっている。

この話で特筆すべきは「目一つの鬼」なる存在である。鬼がやつてきそうな描写もなくいきなり現れて男を食う、男も抵抗する様子もなく食われてしまうという構図が読み取れる。

また、後半では男の両親もその場にいることが分かる。「息子が鬼に食われる」という場面に居合わせてしまう」「鬼に食われながらも男は自分の父母の身を案じる」の二点から、この逸話の悲劇性と「目一つの鬼」という存在の恐ろしさを読み取れる。

風土記全体を見回すと、風土記の逸話の中には、「土蜘蛛」や「夜刀の神」など、人々に害する存在は他にも多く描かれている。それらと比較しながら、「目一つの鬼」の特異性を明らかにすること

目的とする。

まず、風土記の概要を述べる。

『風土記』とは、今からおよそ一三〇〇年前に、大和朝廷から提出するよう詔が出された書物である。現在は「風土記」と呼ばれる各国の土地の記録を制作し提出するように命じた文が『続日本紀』に残っている。以下の文である。

五月甲子、畿内と七道との諸国の郡・郷の名は、好き字を着けしむ。その郡の内に生れる、銀・銅・彩色・草・木・禽・獸・魚・虫等の物は、具に色目を録し、土地の沃瘠、山川原野の名号の所由、また、古老の相伝ふる旧聞・異事は、史籍に載せて言上せしむ。⁽¹⁾

今回は特に、文中の「旧聞異事」について取り上げる。これは、その土地に伝わる変わった昔話を記せという命令で、「阿用郷の鬼」は、『出雲国風土記』大原郡阿用郷に伝わる不思議な昔話ということになる。

現存する『風土記』は『出雲国風土記』、『播磨国風土記』、『常陸国風土記』、『豊後国風土記』、『肥前国風土記』の五本であり、そのうち完本が存在するのは『出雲国風土記』のみである。

旧聞異事の中でも、今回は特に「人ならざる者」が登場する逸話に焦点を当てる。『出雲国風土記』には神が多く登場し、それも「人ならざるもの」であるが、今回はそのような神とは明言されていない者に限定する。

また、本稿では現存する五つの『風土記』の中でも特に『出雲国

風土記』に着目する。

『出雲国風土記』には「総記」の特徴がある。『豊後国風土記』『肥前国風土記』の二国は国の成り立ちとそれにまつわる逸話を、『常陸国風土記』は国の成り立ちの前に「常陸の国の司の解 古老の相伝ふる旧聞を申すこと⁽²⁾」と記し、「この文書は何を記しているか」ということについて簡潔に述べている。

一方、『出雲国風土記』は「老、枝葉を細しく思ひ、詞源を裁ち定む…（わたしは、事のはしばしまでこまごまと考え、その上で主要な語り伝えの原型を判断して正しいものを定めた⁽³⁾）」と述べている。書き手の考えが垣間見られる文を添えている点が特徴である。『出雲国風土記』には、「記紀」でも見られる神がしばしば登場するが、両者は全く違う書かれ方をしている。中央で書かれた「記紀」に沿わず独自の展開をしていることから、『出雲国風土記』の独特な立ち位置と、編纂者の意思が強く出ているといえる。

次に、五風土記それぞれの「時間軸」について考える。出雲国は、須佐之男命が高天原から下ってきた土地である点を始めとして神話的に重要な土地である。そのためか、『出雲国風土記』も神々が主役の話が五風土記の中で最も多い。

他四つはいずれも天皇が中心となる。特に『肥前』『豊後』の二国は景行天皇の巡業説話で構成される。『常陸』は、天皇の逸話の他に「古老の曰へらく（古老がいうことには…）」とはじまり、天地が開けた時よりも以前の話を始めることがあり、天皇を話の主軸に置きつつ、神話時代の時間軸も織り交ぜてくる形式となっている。とはいえ、『常陸国風土記』は、倭武命を始めとした天皇の逸話も多く含まれているため、完全な神代の時間軸として語っているの

は『出雲国風土記』のみということになる。

これらのことから、『出雲国風土記』は他地方の『風土記』よりも想定している「昔」の時間軸が古いと分かる。

「書き手の考えが垣間見える」「取り扱う時間軸が他よりも古い」という二点の特徴に注目したい。

風土記の記事には、他にも、農耕の際に人間ならざる存在に邪魔されるといふ記事が見られる。例えば次のような話である。

古老の日へらく、石村の玉穂の宮に大八洲所しめしし天皇のみに、人あり、箭括の氏麻多智といふ。郡より西の谷の葦原を壑闢きて新たに治りしを献りき。この時、夜刀の神、相群れ引き率て、悉くくに到り来て、左右に防障へて耕佃ることなからしむ。俗云はく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。その形蛇の身にして頭に角あり。ここに、麻多智、大く怒りの情を起こし、甲鎧を著被け自身ら伎を執り、打ち殺し驅逐ひき。すなはち山口に至り、標の税を堺の堀に置いて、夜刀の神に告げて云ひしく、「此より以上は、神の地と為すを聴す。此より以下は、人の曲を作るべし。今より以後、吾れ神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。」といひて、社を設け初めて祭りきといへり。：（『新編日本古典文学全集風土記』より）

これは、『常陸国風土記』行方郡曾尼の駅に残る逸話である。

石村の玉穂の宮で天下をお治めになった天皇（継体天皇）の時代に、箭括の氏麻多智なる者が谷の蘆原という土地を献上したところ夜刀の神という存在が妨害してきたため、麻多智は人と神との間に

境界を引き、崇られないようにその神を祭ったという内容である。

この逸話と「阿用郷の鬼」の逸話にはいくつかの相違点がある。まず時間軸について、「夜刀の神」の逸話は、「石村の玉穂の宮に大八洲所しめしし天皇のみ世」とあるため、いつの話か明確であるが、「阿用郷の鬼」の逸話は「古老の伝へて云ひしく」とあるだけでいつかが具体的でない。

次に、どちらも農耕を邪魔されている点、人ではない者が登場する点に注目する。「夜刀の神」は、「箭括の氏麻多智」という氏が土地を開墾しに来たのを妨害して、「阿用郷の鬼」は、「佃を守る男」を突然食う。それぞれ人間が害を被っているが、その後に大きな違いがある。

「夜刀の神」は、麻多智が追い出したうえで境界を引き、崇られないように祭るといふ対処をしたが、「阿用郷の鬼」は、男が食べられた後どうなったかの記述がない。「今はこうだ」という情報よりも「食われた」という描写に重きを置いていると思われる。

次にそもそも「夜刀の神」「阿用郷の鬼」はどのような存在か、という点に注目する。

「夜刀の神」は、文中に「俗云はく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。」とあり、正体は「蛇の姿をした神」であることが分かる。しかし、鬼は「目一つの鬼」というだけでそれ以上は不明である。

人間側にしても、「夜刀の神」の逸話は「箭括の氏麻多智」と身柄もはつきりしているのに対し、「阿用郷の鬼」は「佃を守る男」のみで、それ以上はわからない。

人ならざる者同士も人間同士も、文中の情報量の差がみられる。「阿用郷の目一つの鬼」の正体については、いくつかの見解が既に

存在している。

加藤義成「目一つの鬼はいわゆる一つ目小僧の類で、民間伝承としては最も広く普及している妖怪の一となつてい、…古典ではこのような怪異伝説は極めて珍しいものの一つで、伝承学上注目すべきものである。」⁵⁾

萩原千鶴「(本文注釈から) 一つ目の妖怪」

「(本文解説から) …本条の一つ目鬼は、おそらく天目一箇神(『紀』神代下。第九段一書第二)、天目一命(『播磨国風土記』託賀郡賀眉郷)などの信仰につらなるものだろう。『紀』によれば天目一箇所神は「作金者」とされていて、鍛冶職の信仰した神である。…採鉱・冶金に携わる山人やその信仰への畏怖の念が、やがて一つ目の妖怪を生み出していったのではないだろうか。」⁶⁾

秋本吉郎「(「目一つの鬼」の注釈より) 異種族人の身体的特徴を異様に見たものであろう。鍛工者が祖神を天目一命とするのと関係あるか。」⁷⁾

内田賢徳「阿用郷に現れた存在もこの天目一命の一統に属する神と考えることができよう。その存在は「目一つ」へと潤色され、そして隻眼の踏輔師へと解釈された。」⁸⁾

関和彦「…目一つの鬼に関するわが国での確たる情報はこの阿用郷伝承であるが、すでに中国においては『芸文類聚』(唐鷗陽撰・五

五七(六四一年)所引の韋曜の『毛詩問』にみえる頭に目がある「妖怪」と同質のものであろう。中国においては古くから目の異常(一つ目など)を呈する存在を「早魃(千ばつ、千ばつを起こす神)」として恐れ、駆逐の対象であつた。「早魃」の神はその「魃」に「鬼」の字を含んでおり鬼の一形態だったのである。(澤田瑞穂『修訂鬼趣談義』)。…ここでは「目一つの鬼」の正体を山田経営を妨害する「早魃」の神と理解しておきたい。」⁹⁾

このように、「目一つの鬼」の正体について、「妖怪の類」「異種族人」「神」といった見解が挙げられている。

しかし、ここで問題なのは、これらの正体が物語中でまったく示されていないという点である。

例えば、「異種族人」という見解は、もつと言うと「たたら製鉄に携わる人々」であり、出雲国が製鉄の盛んな地域であつた点、製鉄の神様として「天目一箇神」がいるという点等から考えられている。仮にこのような背景があつたとして、実際にはそれが示唆されていないのである。この「背景が示唆されていない」という点は重要な特徴である。

二

風土記には、他にも人間ならざる存在として多くのものが採り上げられているが、その代表的なものが土蜘蛛である。

「土蜘蛛」の概要について、『時代別国語大辞典』『日本神話事典』には、

「中央の勢力に対する土着の集団を異類視して表現した語。一定の

部族名ではない。穴居の生活をいとなみ、未開の人種と考えられていた」¹⁰⁰

「ツチゲモは記紀の神武東征説話に討伐の対象となる異族として登場し、その身体的特徴は、尾がある（記）とか、身は短く手足は長い（紀）と記される。」¹⁰¹

次の記事は、記紀における土蜘蛛の逸話である。

【古事記】

○中巻 神武天皇

【久米歌】

基地よりさらに幸行して、忍坂の大室に到りし時に、尾生ひたる土雲の八十建、其の室に在りて、待ちいなる。故爾くして、天つ神御子の命以て、饗を八十建に賜ひき。是に、八十建に宛てて、八十膳夫を設けて、人毎に刀を佩けて、其の膳夫等に誨へて曰ひしく、「歌ふを聞かば、一時共に斬れ」といひき。故、其の土雲を打たむことを明せる歌に曰はく、…如此歌ひて、刀を抜きて一時に打ち殺しき。…

【日本書紀】

○卷第三 神武天皇

己未年の春二月の壬辰の朔にして辛亥に、…天皇、乃ち偏師を分遣皆誅さしめたまふ。又高尾張邑に土蜘蛛有り。その為人、身短くして手足長く、侏儒と相類へり。皇軍、葛の網を結びて掩襲ひ殺す。因りて号を改め其の邑を葛城と曰ふ。…

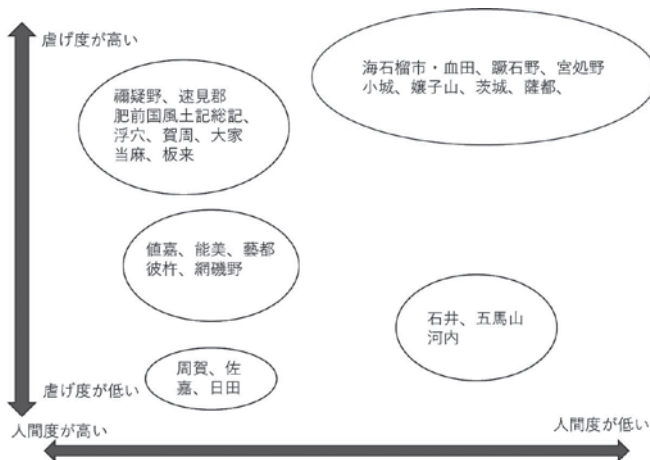
これは一例であるが、右記の記事のように、土蜘蛛は基本的に天

皇によって討伐される存在である。

次に、「風土記」に存在する土蜘蛛の記事を見ていく。

主に『播磨国風土記』『豊後国風土記』『常陸国風土記』に登場し、そのバリエーションは豊富なものである。

次の図は、それらの逸話をグループ別に分類したものである。



「土蜘蛛は天皇（中央）より下の存在である」ことを前提として、人間らしさが強いものほど左側に、虐げられている描写があるものほど上部に寄っている。この場合の「人間らしさ」とは、「名前がある」「コミュニケーションをとる描写がある」場合を指す。

まず一番右下は、土蜘蛛の文化や行動を、客観的に描写したものとなっている。

○石井の郷（『豊後国風土記』）

石井の郷。郡の南に堡ありき。石を用ゐず、土以て築きけり。斯れに因りて名づけて無石の堡と曰ひき。…

次に、右上に分類されたのは、人間としての描写がなく、ただ滅ぼされる流れを書いた逸話である。「討伐↓滅びる」の流れが強調されており、またどう滅ぼされたかについての描写が入る。その土蜘蛛がいかなる精神性をもっているか、どんな行動を起こしどう殺されたかを記している。

○薩都の里（『常陸国風土記』）

此より北に、薩都の里あり。古、国栖あり、名を土雲と曰ふ。爰に兎上の命、兵を発して誅滅しき。時に、能く殺さしめて、「福なる哉」と言へるに因りて佐都と名づく。

次に、左下に分類された二話について考える。これらはいずれも、討伐対象である土蜘蛛が、天皇に協力する姿勢を見せている。土蜘蛛が、ただ滅ぼされる、虐げられるという描写がされるだけの存在ではないことが示される。

○周賀の里（『肥前国風土記』）

周賀の郷。郡の西南に在り。昔者、氣長足姫の尊、新羅を征伐たむと欲はして、行幸しし時に、…加以、陪従の船、風に遭ひて漂ひ没みき。ここに、土蜘蛛、名は鬻比表麻呂あり、その船を拯済ひき。因りて名を救の郷と曰ふ。今、周賀の郷と謂ふは、訛れり。

真ん中あたりに分類される五話は、「命乞いの描写が入るもの」を分けている。討伐を完了せず、「許し」という形で解決しているが、「天皇が許す」「土蜘蛛が許される」という構図をとることで、両者の立場が明確になっている。

○値嘉の郷（『肥前国風土記』）

値嘉の郷。…昔者、同じき天皇、巡り幸しし時に、志式嶋の行宮に在して、西の海を御覧したまふ。…就中の二つの嶋には、嶋別に人あり。第一の嶋の名は小近、土蜘蛛大耳居み、第二の嶋の名は大近、土蜘蛛垂耳居めり。…ここに、百足、大耳等を獲へて奏し聞ゆ。天皇、勅して、誅び殺さしめむとしたまふ。時に、大取等、叩頭て陳べ聞えて曰はく、「大取等の罪は、実に極刑に当れり。…若し恩情を降したまひて、再生くること得ば、御贄を造り奉りて、恒に御膳に貢らむ」…ここに、天皇、恩を垂れて赦し放りたまひき。…

このような逸話とは別に「天皇への献上」が取り入れられた逸話がある。

この逸話には討伐の描写はないものの、「天皇へ献上をする」という形で恭順の姿勢を表しているといえる。

○網磯野（『豊後国風土記』）

同じ天皇、行幸しし時に、此間に土蜘蛛あり、名を小竹鹿奥・小竹

鹿臣と曰ひき。この土蜘蛛二人、御膳を為らむと擬て、田鴛を作すに、その鴛人の声甚謙しかりき。天皇、勅云りたまひしく、「大盪」とのりたまひき。：

最後に、左上に分類された逸話について、これは「名前があるが討伐されるもの」が分類されている。「名前がある」ことで人間らしさを出しつつも滅ぼされるため、名前のない土蜘蛛を滅ぼすよりもより「自分たちとは違う土地の人間をこちら側に平伏させた」印象が強い。

○祢疑野（豊後国風土記）

祢疑野。「柏原の郷の南にある」昔、纏向の日代の宮に御宇しし天皇、行幸しし時に、この野に土蜘蛛あり、名を打援、八田、国麻侶と曰ふ等三人なり。天皇、親らこの賊を伐たむと欲して、この野に在し、勅して、兵衆を歴く勞ぎたまひき。因りて祢疑野と謂ふは、是なり。

分類の結果、程度に違いはあれども土蜘蛛は「天皇に服従させられる」という共通点を持っていることが分かる。

これらの結果、まず土蜘蛛は、記紀においても、「穴居する」「手足が長い」という身体的な特徴は記されるものの、人民を害するという具体的な記述はないことが知られる。さらに、風土記においては、身体的な特徴への言及もないため、土蜘蛛は、「中央に逆らう人々の総称」として述べられていることが知られる。「土蜘蛛」という異様な命名からは、人々に害を為す恐ろしい存在というイメージが極めて強いが、実際にはそのような描写も、それに近い描写す

らも指摘できない。

次章では、この結果をもとに「阿用郷の鬼」と比較する。

三

ここからはこれまでに分かった特徴をもとに、「土蜘蛛」と「阿用郷の鬼」を比較する。

両者の大きな違いは、逸話内における「情報量」であると考ええる。「土蜘蛛」にはしばしば名前がある。「名前があるかどうか」は、それがまだ理解の余地があるものとして書かれているかどうかの一つの基準となるといえる。そうすると、名もなき土蜘蛛が討伐されるだけの逸話は最も理解できない存在として書かれていることがわかる。そういった意味では、「目一つ」という異様な見た目のみで他は描写のない「阿用郷の鬼」は、理解しがたいものという表現がされているように思われる。

また、「コミュニケーションを取れるかどうか」にも注目すべきである。土蜘蛛は、天皇に協力したり命乞いをしたりするなど、度々コミュニケーションを交わす描写が入る。一方「阿用郷の鬼」は他と会話する描写がみられない。

そしてここまでは土蜘蛛の討伐について着目してきたが、逆に土蜘蛛が人間に害をなす逸話があるかという点、『記紀』にある土蜘蛛の逸話も含めてそのような逸話はない。この点も、人間を食った「阿用郷の鬼」とは明確に違いがある。

このような違いは、「中央の価値観」が含まれているかどうかが基準となる。

「土蜘蛛」は、中央側からは「自分たちに逆らい、平定の邪魔を

する地方の人々」という見方をされている。

しかし「阿用郷の鬼」は、討伐されることや、追い出し祀られるような扱いはされていないため、前者のような価値観は持たれていない。どちらも、中央が国を平定する過程で形成された価値観のように思うが、それがない「阿用郷の鬼」は、中央の価値観からは外れた存在であると考ええる。

このような違いが生まれたのは『風土記』の世界観が関係しているといえる。

「阿用郷の鬼」は、『風土記』という作品においてどのような立ち位置にあったのか。

ここでは、永藤靖「『風土記』に現れた空間意識の研究―中央と地域のはざまで―」を参考に進めさせていただく。

まず『風土記』全体の空間について考える。

おそらく中央官人の意識には、まさに〈中央〉から隔てられた〈風俗〉、〈土俗〉こそが「旧聞異事」であつたのである。都から隔たつた習俗、生活を把握することは、実はその地を支配するために必要不可欠なことであつたし、地方へ赴任する国司は、こうした「旧聞異事」を予め知っておく必要があつた。……こうした「風俗」の世界を持つことで、中央はたえず自らを中心としての内部であり続けることができたのである。そして、まさにこの一転に『風土記』編纂の中央政府の意図はあつたといつても過言ではない。¹²

これを参考にとすると『風土記』という作品には、中央（朝廷）が、地方に自ら国情の報告書を提出してもらい、その土地の習俗、生活を「風俗」「土俗」と位置付けることで、「中央（朝廷）」と「地方」

とではっきり線引きをする目的があつたと分かる。この「中央と地方で線引きをする」という視点で「土蜘蛛」「夜刀の神」「阿用郷の鬼」を分析する。

まず「土蜘蛛」について、永藤氏は、

……ここに、国栖名を夜尺斯・夜筑斯と二人あり。……建借間の命、兵を縦ちて駆追ひしかば、賊尽にげ還り、……後より襲撃ひ、尽に種属を囚へ、一時に焚き滅せり。

……人を人とも思わない優越感を、同時に自分たちと生活習俗のことにする異族への畏怖がコンプレックスとなつて、一層激しい闘争心を駆り立てているように見える。……このような逸話は、常陸、肥前、豊後の各風土記に数多くみられる話であり、一つの地域がいかにして中央政府に編入されていったかが手に取るようにわかるのである。¹³

土蜘蛛の逸話においては、中央（天皇）が地方（土蜘蛛）を討伐することで中央側に恭順させる形で取り込み、立場を明確にしているものと考えられる。

次に、「夜刀の神」について永藤氏は、

……この蛇神を追い払つたということは、この神と人とが新たな境界を設けて住み分けを行つたということでもある。……この話を読めば、ムラという〈内部〉をつくりあげるために、蛇神の住む山野を〈外部〉化したことになる。¹⁴

こちらは、討伐によって自分たちの側に取り込んだ「土蜘蛛」とは逆に、追い出し線引きをすることでそれぞれの立場を明確にして

いるという。

つまり、土蜘蛛も夜刀の神も、天皇制の下統治されるという枠組みの中に収まる存在として記述されていると考えられる。

最後に「阿用郷の鬼」についてであるが、こちらは、そもそも登場人物の正体がわからないため、どの人物が「中央」で「地方」なのか判別できないという問題がある。

「阿用郷の鬼」は、そもそも正体がわからない以上やはりこの仕組みに当てはめるのは難しいのである。

ここから、「阿用郷の鬼」は、「中央」「地方」と明確に線引きをし、中央側が平定のために地方の存在のあれこれを取り込んだり追放したりする、といった法則からは外れた存在といえる。

このような「阿用郷の鬼」の逸話の構成は、『出雲国風土記』それ自身が独特な風土記であるということが関係する。先述の通り、『出雲国風土記』は他とは違い「書き手の考えが垣間見える」「神話の時代に重きを置いている」という点が特徴であり、さらには記紀にも登場する神が『出雲国風土記』内において独自の神話を展開している。

このことから、『出雲国風土記』は、中央の影響を受けない独特の風土記であり、そのような風土記であるからこそ、『阿用郷の鬼』のような他風土記にはないような逸話を記すことができたといえる。結論としては、天皇の目的に沿って書かれた土蜘蛛や夜刀の神とは違い、中央側の意図を含まない風土記であり、「阿用郷の鬼」はそれを体現する存在であると考ええる。「阿用郷の鬼」の逸話は、他と比べて描写が少ないことで、結果的に不気味な印象が持たれる。また、「人を食う逸話」は、風土記内においても「阿用郷の鬼」

が唯一であり、その点からも異常性が感じられる。

四

ここまで見てきた通り、「阿用郷の鬼」は、その正体も行動の由来も全くわからない存在であるが、中央の想定した「風土記」編纂の目的や「内部―外部」の線引きに当てはまらないという『出雲国風土記』の独特な立ち位置を明確に体現する存在である。

このような逸話が残されているのは、『出雲国風土記』が、「天皇の下で統治されている」という意識の表現が他の国よりも希薄であるために、「土蜘蛛」や「夜刀の神」のように天皇を脅かす存在は描写されにくく、結果として一見して不気味な印象が持たれたと考ええる。

今回は、他風土記では見られない「神代の時代」を中心に扱う『出雲国風土記』を取り上げた。

「阿用郷の鬼」の話は、異物という点では土蜘蛛と似通っているが、天皇の統一という文脈とはかけはなれた価値観で書かれる。また、耕作する人が食われるというショッキングな出来事が記されているが、その背景を示唆する表現はない。

一方で、襲われた農夫は竹藪の中にいる両親を気遣いながら、生きたまま食べられるという生々しい表現になっている。この話には、理由もわからず人がとって食われるという不気味な出来事として書かれている。

注(1) 青木和夫、稲岡耕二、笹山晴生、白藤禮幸校注『新日本古典文学大系

12 続日本紀(一)』(岩波書店、一九八九年三月、197p)

- (2) 植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集風土記』（小学館、一九九七年一〇月、354p）
- (3) 同右 131p
- (4) 植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集風土記』より「常陸国風土記」行方郷曾尼の駅」（小学館、一九九七年一〇月、375-379p）
本稿で引用される逸話はすべて植垣節也校注・訳『新編日本古典文学全集風土記』（小学館、一九九七年一〇月）から引用したものである。
- (5) 加藤義成『出雲国風土記参究』（今井書店、一九八一年五月、434p）
- (6) 荻原千鶴『出雲国風土記釈注』（講談社、一九九九年六月、294p、297-298p）
- (7) 秋本吉郎『日本古典文学大系2風土記』（岩波書店、一九六五年、238p）
- (8) 内田賢徳「目くろの鬼」とくろ潤色」（『風土記研究』三四号、二〇一〇年十一月、115p）
- (9) 関和彦『出雲国風土記註論』（明石書店、二〇〇六年八月、1158-1160p）
- (10) 上代語辞典編修委員会（代表：澤瀉久孝）編『時代別国語大辞典上代編』（三省堂、一九六七年二月、468p）
- (11) 大林太良、吉田敦彦『日本神話事典』（大和書房、一九九七年六月、211-212p）
- (12) 永藤靖「『風土記』に現れた空間意識の研究—中央と地域のはざままで—」（『明治大学人文科学研究所紀要』、明治大学人文科学研究所発行、第三十冊、一九九二年三月、207p）
- (13) 同右 203p
- (14) 同右 200p

受贈雑誌 (11)

京都教育大学国文学会誌	京都教育大学国文学会
京都語文	佛教大学国語国文学会
京都大学国文学論叢	京都大学大学院文学研究科国語学国文学研究室
キリスト教文学研究	日本キリスト教文学会
金城日本語日本文化	金城学院大学日本語日本文化学会
近代	神戸大学「近代」発行会
群馬県立女子大学国文学研究	群馬県立女子大学国語国文学会
藝文研究	慶應義塾大学藝文学会
言語の研究	東京都立大学言語研究会
言語表現研究	兵庫教育大学言語表現学会
現代日本語研究	大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座現代日本語学研究室
高知大國文	高知大学国語国文学会
國學院雑誌	國學院大學
國學院大學大学院文学研究科論集	國學院大學大学院文学研究科学会
國學院大學栃木短期大学 日本文化研究	國學院大學栃木短期大学 日本文学
国語学研究	東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会